福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI
REPOSITORY

小学校歴史学習における史料と科学の方法を媒介とした出来事の解釈学習の論理：ホルト・データバンク・システム単元「誰がアメリカを発見したのか」の場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺尾, 健夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10105

福井大学初等教育研究　2016，第2号，pp.9－20

実践論文

小学校歴史学習における史料と科学の方法を媒介とした出来事の解釈学習の論理
― ホルト・データバンク・システム　単元「誰がアメリカを発見したのか」の場合 ―

福井大学教育学部　寺　尾　健　夫

本稿では、1960年代の米国で開発された、新社会科の初等教育段階の代表的なカリキュラムであるホルト・データバンク・システム（Holt Databank System）の単元「誰がアメリカを発見したのか」の分析をとおして、認知構築主義に基づく歴史の出来事の解釈学習の論理の解明を試みた。その結果、3つの内容構成原理と3つの学習方法原理が明らかとなった。認知構築主義に基づく出来事の解釈学習の論理は基本的に3つの特質をもつ。第一は国家の「主権者」は誰かという政治学の概念を習得させていること、第二は既有の概念を活用させながら、「主権者」の概念について社会科学の方法を用いて習得させていること、第三は社会科学の方法を用いる際に、歴史学、考古学、民俗学など、学説の妥当性の検証に関わる多様な学問領域で活用されている史資料を用いていることである。

キーワード：構築主義、構成主義、新社会科、歴史学習、探究学習、史資料

1　問題設定

本稿では、1960年代に米国で新社会科のカリキュラムとして開発されたホルト・データバンク・システム（Holt Databank System。以下「ホルト」と略記）の単元を分析することで、構築（構成）主義の歴史学習の論理を明らかにする。この研究は、筆者がこれまで行ってきた「現代アメリカにおける構築主義歴史学習の原理と展開」を解明する研究（寺尾、2014）の一環として行う。本研究は先行論文で示した構築主義歴史学習の類型の中では、「認知構築主義に基づく出来事の解釈学習」に位置づく。認知構築主義に基づく出来事の解釈学習の事例としては他に、米国のアマースト・プロジェクトの単元が挙げられる[注1]。これは「史料を媒介とした」出来事の解釈学習であるが、本稿で分析するホルト単元は、「史料と社会科学の方法を媒介とした」学習である。社会科学の方法とは、仮説を立ててこれを史料などの証拠を用いて検証していく中で、社会事象を規定している原理や傾向性を明らかにしていく方法である。つまり本稿の出来事学習は、史料を用いて仮説を立ててそれを検証していくものであり、仮説・検証を行わないアマースト単元の出来事の解釈学習とは異なる。

ホルトに関しては、①藤井（1975、1976）、②川崎（1987）、③山田（1999、2001）の先行研究がある。藤井は、全12単元から成るホルトの目的を「小さな社会科学者」の育成であるとし、前半部（単元1～5）で歴史学の探求方法の習得を、後半（単元6～12）で政治学の概念を習得させることを明らかにしている。しかし、単に目標や内容の分析にとどまっており、原理の抽出までには至っていない。また②川崎の研究は、マルチメディア教材の活用に焦点を当ててその種類と利用方法を明らかにしたものである。③山田の研究は、ホルトが「市民性教育のための社会科歴史」であり、それが後半部での政治学の概念の習得部分に反映されていることを明らかにしている。しかし②③とも、子どもの「理解形成の論理」までは分析していない。

ホルトは子どもの内面からの理解の形成（構築）力を考慮して開発されたものである。

本稿では、ホルトが子どもの理解形成の原理に基づいて、自律的な歴史認識・社会認識を子どもに獲得させていることを明らかにする。

2　歴史学習の目標

ホルト・データバンク・システム（Holt Databank System）は1960年代から70年代にかけてアメリカで開発された「新社会科」の代表的なカリキュラムである（表1参照）。この社会科カリキュラムは次のような考え方に立脚している。①学習者の概念の習得は、自然になされるわけではなく、系統的に経験を組織して概念を習得させる必要がある、②人や社会を理解する際には事実についての知識よりも概念の方が役立つ。なぜなら事実は時とともにその重要性・意義が変化するが、概念は時が変化しても基本的指標として役立つからである。ホルト・データバンク・システムの目標は2つある。①社会科学（政治学・経済学・社会学・歴史学・地理学など）についての基本概念の習得、②社会科学の方法の習得である。②社会科学の方法の習得とは、学習者が社会科学者のように研究をしていくこと、つまり教師の指導の下で社会科学の方法を用いて学習問題を科学的に解決し、法則や概念を獲得することである。このホルト・データバンク・システムのカリキュラムは、上記の2つの目標が幼稚園から小学校段階にわたって達成されるように組織されている。

表１　ホルト・データバンク・システムの全体計画

学年	テーマ	学習の中心となる社会科学	
		分析的社会科学	総合的社会科学
幼稚園	私自身		
小1	人々についての探求		
小2	共同体についての探求		
小3	都市の探求	地理学	経済学
小4	文化の探求	人類学	社会学
小5	アメリカ史の探求	歴史学	政治学
小6	技術の探求	経済学	人類学

歴史学習は、全体計画の中では第5学年で行われ、歴史学習で中心となるのは歴史学と政治学の研究である。歴史学は分析的社会科学として、政治学は総合的社会科学として選択されている[注2]。学習の展開としては、教師が提供する写真やスライド、サウンド・ストリップ、地図などの多様な教材をもとに、提示される社会事象がなぜそうなっているのかという疑問を問題として見つけさせる。そして教師の指導の下で社会科学の方法を用いて科学的に解決させ、法則や概念を獲得するようになっている。

３　授業構成原理

３.１　カリキュラムの全体計画とその論理－歴史による政治学研究

ホルト・データバンク・システムの全体計画は表1のようである。幼稚園から小学校第2学年までは社会集団がテーマとなり､その社会集団の規模に沿って学習する。この際に用いられる社会科学の方法は、基礎的な社会科学の方法と基本的な概念（表2の「概念」の欄を参照）である。また小学校第3学年から第6学年までは、社会科学の学問領域（地理学や文化人類学など）がテーマとされ、個別の社会科学（分析的社会科学と総合的社会科学）を組み合わせた研究・学習をする。

幼稚園から小学校第6学年までに習得される概念は表2に示すようなものになっている。歴史学習は第5学年で行われ、その全体計画は表3のようになる。

我が国におけるホルト・データバンク・システムの研究では､『アメリカ史』の全体計画を大きく2つに分ける。第1～第5単元までと第6～第12単元までである（藤井、山田､1999､2001）。第1 ～第5単元の位置づけについて、藤井は歴史学の探求方法を習得する単元として、また山田は多民族・多文化研究を行う単元として位置づけている。しかし筆者は、第1～第12単元までが政治学を中心としたひと続きの研究として組織されていると考える。

表２　小５「アメリカ史の探求」で習得される概念

テーマ	学問領域	概念
アメリカ史の探求	歴史学	史的証拠、衝突、工業化、独立、移民、移住、都市化、国民
	政治学	価値観、意思決定、政府、ルールと法、権威と権力、革命、政府の支部､政府のレベル､代議制、衝突

表３　『アメリカ史』の全体計画

単 元	単　元　名
単元1	誰がアメリカを発見したか
単元2	アメリカインディアン
単元3	コロンブス以前のヨーロッパ人
単元4	西アフリカ人
単元5	新しい人々の到来
単元6	新しい国
単元7	西漸運動
単元8	リンカーンは奴隷解放宣言を出すべきだったのか
単元9	産業革命
単元10	都市の人々
単元11	民主主義を機能させる
単元12	問題と決定

３.２　単元構成とその論理－アメリカ民主主義実現過程としての合衆国史

（１）単元計画

１）目標

単元「誰がアメリカを発見したのか」は、アメリカに定住したとされる5つのグループ（コロンブスとその後継者たち、インディアン、バイキング、中国人、エジプト人）のアメリカ到来を調べ、誰がアメリカの主権者としての資格を持つかを検討する単元である。

本単元の中心的な目標は2つある。ひとつはアメリカのオリジナルな主権者が誰かを明確にすること、もう一つは、さまざまなタイプの史的証拠を処理する技能と手続き的知識を習得し、歴史学の方法についての理解を深めることである。

教師用指導書では、この2つの目標は4つに類型化されている。①知識目標、②技能目標、③探求プロセス目標、④情意目標である。

①知識目標
（1）事実
1. コロンブスが1492年にアメリカを探検したことを示す十分な証拠が存在する。
2. コロンブスよりもずっと以前に、他の集団がアメリカに到達したという主張を支持する証拠が存在する。
3. 歴史研究に役立つさまざまな種類の史的証拠（航海日誌、口頭伝承、考古学的発見など）
（2）観念：　史的証拠
②技能目標
1. 読解史料の中から5つのグループの主張を読み、内容を評価するためにデータを収集することができる。
2. 地図の作成、地図記号の読み取りや作成、様々な地図からの情報を解釈することによって、あるいは地図からの情報と他の情報を比較して地図を作成する。
3. バイキングの冒険談（サガ）や賛歌のレコードを聴くことで、バイキングがアメリカに到達した

という主張に関するデータを集める。
③探求プロセス目標
（1）データの収集
1. 観察:史的証拠についての視覚的資料を提供され、5つのグループによるアメリカ発見の主張に関するデータを集める。
（2）データの組織
1. 分類：学習者は5つの集団についての主張に関する史的証拠を提供され、それらを分類する。この場合の史的証拠は、各集団について研究者の主張を支えるのに役立つものである。
2. 比較：5つのグループの主張に関する様々な史的証拠が提供され、それらを比較することで主張の妥当性を判断する。
（3）データの活用に
1. 推論：さまざまなタイプの史的証拠を提供され、5つのグループの中の1つないしそれ以上のグループについて研究した、アメリカでの探検および定住の可能性・蓋然性について推論する。
2. 仮説をつくる：学習者は「誰がアメリカを発見したのか」という問いに試験的に答える仮説を作ってこれを検証する。
3. 一般化：各グループの主張を支持する証拠を提供されて、誰がアメリカを発見したかについて一般化された答えを作り、主張する。
④情意目標
1. 学習者は、さまざまな研究者が主張する各仮説に対する自分の態度を明確にする。
2. 異なるタイプの史的証拠を上手に処理できるようになるに従って積極的な自己概念を発展させる。
3. 不十分な証拠にもとづく仮説は再度吟味すべきであるという自分の意思を示すようになる。

(A.O.Kownslar,W.R.Fielder,K.G.Hogle,1976, pp.1-2)

2) 活動（時間）の構成

単元の構成は表4のようになっている。単元は14日間で展開され、全体としては表に示すような学習テーマのもとで10個の小単元で組織されている。

（2）単元の概要

本単元の学習内容は以下の4つである。

①史資料にはどの様なタイプがあるか。②史資料をどの様に評価し、比較すべきか。③史資料から何をどの様に推論できるのか。④説を立て、それを検証し、仮説をどの様に一般化できるのか。

小単元1では、学習者は、はじめに映画を視聴し、アメリカ史には未だ解明されていない多くの謎があることを知る。そして過去の謎を解き明かす仕事をしているのは歴史家であり、歴史家は様々な史的証拠を用いて研究していることを知る。

次に、アメリカ史の未解明な問題のひとつは「誰がアメリカを発見したか」であることが紹介され、答えを予想するように求められる。これに対してほとんどの学習者はコロンブス、あるいはインディアンと予想する。バイキングと予想する者もいる。教師は学習者が予想しにくいもの（中国人とエジプト人）について、歴史家の中にはこれらの人々がアメリカを発見したと考える者もいることを紹介する。これらの予想はアメリカの発見者についての5つの仮説（コロンブス説、インディアン説、バイキング説、中国人説、エジプト人説）としてまとめられる。

続いてこれらの仮説が検証され、学習者は史的証拠が重要な働きをすることを学ぶ。検証の事例としてコロンブスの本当の顔や名前がどの様なものであったかが問われる。そして彼の肖像や名前の綴りは複数のものがあり、素顔や名前について正確なことは未だにわかっていないことが明らかにされる。そして、さらに正確な検討を行うには、より厳密な情報が得られる史的証拠（コロンブスの日記、航海日誌など）が必要であることが明らかにされる。

小単元2～8までは、アメリカを発見した可能性のある人としてコロンブス説、インディアン説、バイキング説、中国人説、エジプト人説の5つの仮説が検討される。

小単元2ではコロンブス説が検討される。この説がどの様な史的証拠を通して検討できるかが問われ、航海日誌や日記の内容から検討できることが学ばれる。そして検証の過程では、これらの史的証拠を通してコロンブスがなぜ先住民をインディアンと呼んだか、なぜインディアンを大陸の発見者・所有者と見なしたのか、アメリカがなぜ新世界と呼ばれたのかが検討され、最後にコロンブス説はどの様に修正されるかを明らかにする。

小単元3と4ではインディアン説が検討される。小単元3では、インディアン説の検討のために大陸の地図や考古学的遺跡の分布図が証拠として用いられる。また、考古学的研究方法（火打ち石などの考古学的遺物、放射性同位元素による年代測定法を用いた動植物の炭素分析）も紹介され、史的証拠の概念が深められていく。小

表４　小単元の学習テーマ

小単元	学習テーマ	日程
1	コロンブスの本当の名前は何だったのか	第1日
2	コロンブスは本当にアメリカを発見したのか	第2、3日
3	インディアンがアメリカを発見したのか	第4日
4	新世界と旧世界の動植物	第5日
5	バイキングはコロンブスよりも前にアメリカに到達していたのか	第6、7日
6	考古学とバイキング	第8日
7	中国人がアメリカを458年に発見していたのか	第9、10日
8	エジプト人がアメリカを発見したのか	第11日
9	誰がアメリカを発見したのか	第12、13日
10	一般概念を作る	第14日

(Kownslar, A. O., W. R. Fielder, W. R., Hogle, K. G..1972, 1976)

単元4では北アジアのシベリアと北米に生息した熊やオオカミなど、動物の比較から動物の類似性や共通性が知らされ、北アジアに住んでいた人々の大陸間移動の可能性が推理される。そして民族の大陸間移動説との関連で、インディアン説が考古学的証拠や動植物の分布資料によってどの様に立証できるかが検討される。

小単元5・6ではバイキング説が検討される。小単元5ではバイキング説を確かめるために、バイキングの英雄談サガなどの口頭伝承や考古学的遺物（鏃、紡錘、鉄床など）が史的証拠として利用される。続く小単元6では考古学の特性を学ぶ。英雄談サガ（口頭伝承）や考古学的証拠は、コロンブス説の検討で利用した航海日誌や他の史的証拠と比べて、信頼性がどの様に評価されるかが検討される。また考古学者と歴史学者との共通点や相違点が明らかにされ、放射性年代測定法などの新しい研究方法についての理解が深まる。そして最後に、バイキング説がどの様に修正されるか検討する。

小単元7では中国人説が検討される。ここでは新しい史的証拠として中国の史書（物語）と、北米の植生が検討される。そしてバイキングの英雄談サガ、考古学的証拠、航海日誌と比較して史書の史的証拠としての特性が明らかにされ、史的証拠の概念が拡大・発展する。最後に、中国人説がどの様に修正されるか検討する。

小単元8ではエジプト人説が検討される。ここではピラミッドや壁画などの考古学的遺物や現在も使われている葦船、海流の地図、ヘーエルダールの葦船による大西洋横断の試みなど、従来の仮説検証過程にはなかった史的証拠や実験史学という新しい方法が紹介され、史的証拠や歴史の研究方法についての知識や概念が発展する。そして最後に、エジプト人説の妥当性が検討される。

小単元9では小単元2～8で検討した5つの仮説の検証結果を総合し、誰がアメリカを発見したかについて最も有力な説が判定される。その判断の基準となるのは史的証拠（考古学的発見物、口頭伝承、史書、実験航海など）や仮説立証のための証拠である。この段階では、史的証拠や研究方法についてこれまで学習した内容が総合され概念が発展する。

最後の小単元10では歴史学の研究方法において中心的位置を占める史的証拠について、これまでの学習を基に一般化が行われる。また、アメリカの発見者が誰であるかはアメリカの歴史にとって重要な問題であることが確認される。

（3）パートの構成

（2）では単元の概要を見てきたが、本論文ではこれをそのまま使うのではなく、学習者の理解の過程を明確にするために以下の4つのパートに分けて考察した。

小単元1　　→パート1
小単元2・3　→パート2
小単元4～8　→パート3
小単元9・10　→パート4

これら4つのパートの構成は、次のような段階的構造をとっている。

パート1では誰がアメリカを発見したのかが問われ、①コロンブスや②インディアンであるという常識的解答に対して疑問が投げかけられ、他の可能性として③バイキング説、④中国人説、⑤エジプト説が提起される。そして①～⑤は5つの仮説とされる。

パート2では、①コロンブス説と②インディアン説が確かめられる。①ではコロンブスは中部ヨーロッパと南部ヨーロッパからアメリカに到来して定住した主権者として検討される。また②では、インディアンは北アジアからアメリカに到来した主権者として検討されることになる。

次のパート3では③バイキング説、④中国人説、⑤エジプト説が検討される。これらは、歴史学者や考古学者による学問的な仮説である。③バイキング説は北欧から到来した主権者として検討され、④中国人説はアジアから到来した主権者として、⑤エジプト人説は北アフリカから到来したアメリカの主権者として可能性が検討される。そして③④⑤の仮説に対しては歴史学、考古学の研究方法を用いて検討が行われる。

最後のパート4では、パート1～3の学習を総合して誰がアメリカを発見したのかという問題に対する解答をまとめる。ここではアメリカの発見者は誰かという歴史上の出来事についての総合的解釈、アメリカの主権者が誰かの検討、主権者概念の一般化がなされる。また、史的証拠の概念や史料の批判的考察など歴史学の研究方法がまとめられる。

以上をまとめると表5のようになる。

（4）単元全体の特質

単元の概要、パートの構成をもとに単元「誰がアメリカを発見したのか」全体の特質をまとめると次のようになる。

第1の特質は、この単元はアメリカの本当の発見者は誰なのかを検討する中で、ひとつの国の主権者の資格を誰（民族や人種など人々の集団）が持っているのかを検討する構成となっていることである。第2の特質は、主権者を検討する中で史料批判（歴史学の方法）や年代測定の方法（考古学の方法）など、歴史科学の方法を習得させていることである。本単元では、考察の対象を一般的な事柄から科学的な事柄へと変化させることによって、学習の段階に応じた習得が可能になるような構成になっている。

以上、単元構成とその論理について述べてきた。次項では、授業展開とその論理について述べる。

4　授業展開とその論理

4．1　内容構成原理－アメリカ合衆国の主権者概念（ルール）の検討

ここでは、本単元の授業展開とその内容構成原理を明

表５　パートの構成

パート	検討対象	小単元名
パート1　出来事の解釈の真偽を問う	アメリカの発見者についての常識的理解の検討	小単元1　コロンブスの本当の名前は何か
パート2　一般的・常識的解釈を確かめる	コロンブス説：中・南欧人	小単元2　コロンブスがアメリカを発見したのか
	インディアン説：北アジア人	小単元3　インディアンが発見したのか 小単元4　新世界と旧世界の動植物
パート3　学説を確かめる	バイキング説：北欧人	小単元5　バイキングがアメリカを発見したのか 小単元6　考古学とバイキング
	中国人説：アジア人	小単元7　中国人がアメリカを発見したのか
	エジプト人説：北アフリカ人	小単元8　エジプト人がアメリカを発見したのか
パート4　解釈の基準を明らかにして出来事を解釈する	アメリカの主権者概念の一般化	小単元9　誰がアメリカを発見したのか
	歴史学の研究方法の一般化	小単元10　一般概念を作る

（筆者作成）

らかにする。

内容構成原理を考える上で重要なことは、教師がどの様な発問をし、それに対して学習者がどの様に考え、答えるかを分析することである。なぜなら、内容構成原理は学習者が習得する内容から引き出されるものであり、その内容は教師の発問に学習者が答えることで初めて明らかになるからである。そこで教師の発問と学習者の答えを分析するものとして表6を作成した。以下、表6の内容を縦軸・横軸の順に説明していく。

縦軸は学習の「段階」を示しており、4つのパートに分けられる。

パート1：アメリカの発見者は誰かを予想する。
（5つの説があることを知る）
パート2：コロンブス説とインディアン説を検討する。
パート3：バイキング説、中国人説、エジプト人説を検討する。
パート4：歴史的証拠をもとに最も有力な説を総合的に判断する。

次に表6の横軸を説明する。横軸には表の左から順に「小単元名」「教師の発問」「歴史理解の内容」「認識過程」の欄を設けた。この表で重要なのは「教師の発問」と右端の「認識過程」である。単元の学習内容の習得はこの2つを基軸にして行われるからである。「認識過程」欄は、学習者に理解させたい最も重要な内容であり、「社会科学の方法による解釈」と「主権者の資格判断」の2つの欄に分けた。「社会科学の方法による解釈」の欄は、史的証拠や考古学的証拠にもとづいた解釈の内容である。「主権者の資格判断」とは、主権者としての資格の有無の基準とこれに基づく判断である。学習者の理解は「歴史理解の内容」をふまえて、最も高いレベルである「認識過程」の欄に示す内容の理解に到達する。学習者の理解がこのレベルに到達することができるように教師は意図的・計画的な発問をする。

次に表6の横軸に従って各パートの概要を説明する。パート1では、アメリカの発見者は誰かを予想する。教師は「誰がアメリカを発見したのか」を問い（「教師の発問」）、学習者のほとんどはコロンブスやインディアンであると予想する。しかしコロンブスは名前の綴り、出生地などに諸説があり、証拠としては十分でないと知る（「歴史理解の内容」）。その結果、アメリカの発見者が誰かは、歴史的証拠の種類や信頼性によって複数の解釈があることを理解し（「認識過程」欄の左側「社会科学の方法による解釈」）、誰がアメリカの発見者であるかの判断は通常は有名かどうかを基準にしてなされることを知る（「認識過程」欄の右側「主権者の資格判断」）。

パート2～3では、コロンブス説、インディアン説、バイキング説、中国人説、エジプト人説の5つが仮説として順に検討される。

パート2でまず検討されるのはコロンブス説である。「どの様な証拠からコロンブスがアメリカを発見したと言えるのか」が問われ（「教師の発問」）、学習者は、航海日誌、当時の絵画、流行した用語、地図などを検討する（「歴史理解の内容」）。その結果、コロンブスがアメリカ大陸に到達したことは日誌などの史料批判を通してほぼ確実なことを理解する（「社会科学の方法による解釈」）。またコロンブスは先に到達していた人々をインディアンと呼び、奴隷として支配しようとしたこと、ヨーロッパ人にとってアメリカ大陸の発見は富の可能性を秘めた有望な土地の発見を意味し、その期待は「新世界」という用語に込められてヨーロッパ中に広がったことを理解する（「歴史理解の内容」）。その結果、コロンブスを含むヨーロッパ人はインディアンよりも後に到達・定住したにもかかわらず、「アメリカの発見者」とされていることを理解する（「主権者の資格判断」）。

次にインディアン説が検討される。まず、「インディアン説は考古学的証拠や動植物の分布によってどの様に立証できるか」が問われる（「教師の発問」）。これに対して学習者は、北アジアと北米で発見された火打ち石、熊やオオカミの骨、食用植物などの考古学的遺物の分布や放射性同位元素による年代特定などから、インディアン説は信頼性が高いことを理解する（「歴史理解の内容」）。その結果、インディアンがアメリカ大陸に到達し

たことは考古学的証拠によりほぼ確実であることを理解する（「社会科学の方法による解釈」）。またインディアンは1万2千年前にシベリアからアメリカ大陸へと移動し、長い時をかけて居住地域を広げたことを理解する（「歴史理解の内容」）。その結果、インディアンは最初に「到達・定住」しており、アメリカの主権者とされてよいことを理解する（「主権者の資格判断」）。このようにしてパート2では、土地の主権者とはその土地へ「到達・定住した」人々であるという基準をうち立て、その基準に従えばコロンブスを含むヨーロッパ人とインディアンは主権の有資格者であることを理解する（パート2における「主権者の資格判断」）。

続いてパート3では、バイキング説、中国人説、エジプト人説の順で検討される。

バイキング説ではまず、「バイキングはコロンブス以前に北米に到来していたのか」が問われる（「教師の発問」）。バイキングはA.D.1000年頃にグリーンランドに一時期定住し、口頭伝承である英雄談「サガ」によれば北米のハドソン湾まで旅をしてインディアンに出会っていた。また骨、鏃、紡錘、鉄床、石絵などの考古学的遺物からもアメリカ到来は立証されるという理解がなされる（「歴史理解の内容」）。その結果、バイキングがアメリカ大陸に滞在したことは口頭伝承や考古学的証拠からほぼ確実であると理解される（「社会科学の方法による解釈」）。しかし、彼らは単に「一時的に」滞在していただけの人々であり、主権の有資格者とは言えないことも理解する（「主権者の資格判断」）。

次に中国人説が検討され、「中国人がA.D.456年にアメリカを発見していたのか」が問われる（「教師の発問」）。これに対しては、史書の登場人物の慧深はA.D.458に北米まで航海し40年過ごした後帰国していること、この史書はコロンブスやバイキングなどの歴史的証拠よりも古く、信頼性は低いことを理解する（「歴史理解の内容」）。その結果、中国人がアメリカに到達したことはほぼあり得ないことを理解する（「社会科学の方法による解釈」）。そして、「到達・定住」という基準を満たさないため主権者の資格はないことを理解する（「主権者の資格判断」）。

パート3の最後はエジプト人説であり、「エジプト人はアメリカを発見していたのか」が問われる（「教師の発問」）。ヘーエルダールの航海実験記録を読み、彼が航海実験に成功し新たな検証方法を開拓したことでエジプト人説の妥当性が高まったことを知る。ここでは、他の仮説では用いられなかった史的証拠や実験史学という新しい方法が紹介され、史的証拠や歴史の研究方法についての知識や概念が発展する。しかし同時に、ヘーエルダールの実験航海以外の証拠は不足しているということも知る（「歴史理解の内容」）。その結果、エジプト人がアメリカに到達したことは実験考古学による仮説の検証を通しても確証が得られていないことを理解する（「社会科学の方法による解釈」）。そして、エジプト人が到達したか否かは未確認であり、「到達・定住」という基準を満たさないため主権者であるという可能性はないことを理解する（「主権者の資格判断」）。

最後のパート4では、5つの仮説の検証結果を総合し、最も有力な説が判定される。まず本単元の中心的発問「誰がアメリカを発見したのか」が再び問われる（「教師の発問」）。これに対しては、出来事の解釈の妥当性は、証拠（日誌、口頭伝承、物語、実験航海など）の信頼性に支えられ、信頼性の判断は、証拠と記録者の信頼度によってなされることを理解する（「歴史理解の内容」）。その結果、過去の出来事についての解釈・理解は科学の方法である史的証拠の特性をもとにした信頼性の判断によってなされることを理解する（「社会科学の方法による解釈」）。またアメリカの発見者とは最初に「到来・定住」した人々であり、これらの人々が主権者の資格を持つため、コロンブス説とインディアン説が最も有力であると理解する（「歴史理解の内容」）。その結果、主権者であるか否かの基準はその「到達の時期と定住の有無」であることを理解する（「主権者の資格判断」）。

単元は以上のような内容構成になっている。これらの内容構成と表6から以下の3つの内容構成原理が抽出できる。

内容構成原理１　社会科学の方法の習得

第1の原理は、「学習過程」の観点からみると、学習者に社会科学の方法を習得させる内容になっているということである。社会科学の方法とは歴史学の方法であり、歴史に関する証拠（史的証拠）に基づいて仮説を検証する方法である。史的証拠には史料（航海日誌、口頭伝承、歴史書など）、考古学的発見物（遺跡、骨製品・生活用具などの人工遺物）、言語の特殊な使い方（新世界、新大陸などの用語）、地図がある。学習者はまず仮説を立て、証拠となる文書を読み、写真を見たり、レプリカに触ったりしながら仮説を検証する。これを具体的にパート2のインディアン説を例にとると以下のようになる。学習者は「最初に到来したのはインディアンではないか」という仮説を立てる。そして、1万2千年前の氷河期にはベーリング海が陸続きであったという地図、そして考古学的発見物の分布の地図（シベリアと北米では住居跡、石器や動物の骨、食用植物の種など共通の遺物が発見されていることを示す地図）を見て、この時期には人や動物の大陸間移動が可能であり、インディアンが北米で生活していたことが推測される。その結果、学習者は「最初に到来したのはインディアンではないか」という仮説は正しいと判断する。

このようにして、仮説を立てて証拠をもとにして検証するという社会科学の方法を習得するような学習内容になっているのである。

内容構成原理２　社会科学の概念の習得

第2の原理は、「歴史理解の内容」の観点からみると、

表6　ホルト単元「誰がアメリカを発見したのか」の構成

注　○：出来事理解の内容　●：歴史学の方法の内容

	小単元名	教師の発問		歴史理解の内容	認識過程		
		中心的問題	具体的に考察される問題		社会科学の方法による解釈	主権者の資格判断	
パート1 出来事の解釈の真偽を問う	＜小単元1＞ コロンブスの本当の名前は何か	●歴史家は歴史をどのように解明するのか。 ◎誰がアメリカを発見したのか。	○アメリカ史で何が未解明か。 ●歴史家はどの様な歴史的証拠を利用するか。	○アメリカの発見者（コロンブスと言われるが定説ではない。） ●歴史家は日記・日誌、遺物や遺跡などの歴史的証拠を用いて仮説を確かめ、過去の出来事を解明する。	●アメリカの発見者が誰かについては、歴史的証拠の種類や信頼性によって複数の解釈がある。	有名かどうか	基準から見て主権者の可能性のある人々
			○どの様な説があるか。 ○コロンブスの詳細な情報はあるか。	○コロンブス説、インディアン説、バイキング説など。 ○コロンブスも名前の綴り・生年・出生地に諸説あり、彼を発見者とする証拠は十分ではない。			
パート2 一般的・常識的解釈を確かめる	【中・南欧人】 ＜小単元2＞ **コロンブス**がアメリカを発見したのか	【コロンブス説の検討】 ●どの様な証拠からコロンブスがアメリカを発見したと言えるのか。	●コロンブス説はどの様な歴史的証拠で証明できるか。 ○彼はなぜ先住民をインディアンと呼んだのか。 ○インディアンを大陸の発見者・所有者と見なしたか。 ○アメリカはなぜ新世界と呼ばれたのか。 ○これまでの歴史的証拠から仮説（コロンブス説）はどの様に修正できるか。	●航海日誌、当時の絵画、当時流行した用語、地図など。 ○アメリカをインドと間違えて、既に大陸に定住していた先住民をインディアンと呼んだ。 ○先住民を米大陸の所有者とは見なさず、奴隷として支配しようと考えた。 ○インディアンの後に定住したヨーロッパ人にとってアメリカの発見は富の可能性を秘めた有望な土地の発見を意味し、その期待は「新世界」の用語に込められてヨーロッパ中に広がった。→アメリカの発見は富の獲得を期待したヨーロッパ人の視点からの「発見」であった。	●コロンブスが米大陸に到達したことは日誌の史料批判を通してほぼ確実なことと判断できる。	後で到達・定住した　支配侵略	
	【北アジア人】 ＜小単元3＞ **インディアン**がアメリカを発見したのか ＜小単元4＞ 新世界と旧世界の動植物	【インディアン説の検討】 ○**インディアンがアメリカを発見したのか。**	○インディアン説とはどの様なものか。 ●インディアン説は考古学的証拠や動植物の分布によってどの様に立証できるか。	○インディアンは12000年前にシベリアから北米へ大陸間を移動し、長い時をかけてアメリカ大陸に居住地域を広げていった。 ●インディアン説は北アジアと北米での人工遺物（石器や動物の骨）や食用植物などの考古学的発見物の分布や年代特定などから高い可能性として立証できる。	●インディアンが米大陸に到達したことは考古学的証拠をもとにしてほぼ確実と判断できる。	最初に到達・定住した	
パート3 学説を確かめる	【北欧人】 ＜小単元5＞ **バイキング**がアメリカを発見したのか	【バイキング説の検討】 ○バイキングはコロンブス以前に北米に到来していたのか。	○バイキングの英雄談サガ（口頭伝承）からどの様なことがわかるか。 ●サガの他にどの様な歴史的証拠があるか。 ●仮説を確かめる歴史的証拠にはどの様なものがあるか。 ●サガ、航海日誌、考古学的証拠の、証拠としての信頼性はどの程度か。	○バイキングはコロンブス以前のA.D.1000年頃にグリーンランドに定住していた。英雄は北米のハドソン湾まで旅をしてインディアンに出会っていた。 ●骨、道具、石絵などの考古学的発見からもバイキングのアメリカ到来が立証される。 ●仮説を確かめる証拠には口頭伝承、史料（文献）、考古学的発見物の3つがある。 ・**サガ**…A.D.1000年以前の出来事を知る重要な手がかりであるが口頭伝承であり、厳密な資料批判が必要。←多くの人々の考えが介在しているため。 ・**航海日誌**…サガより制作年代が新しく信頼性の高い証拠　←特定の人物が書いており著者の見方を分析しやすい。 ・**考古学的発見物**…サガよりも信頼性が高いが、情報量はサガよりも少ない。	●バイキングが米大陸に滞在したことは口頭伝承や考古学的証拠からほぼ確実と判断できる。	一時的滞在であった	基準から見て主権者の可能性のない人々
	＜小単元6＞ 考古学とバイキング		●考古学者と歴史学者の共通点と相違点は何か。 ○この仮説は得られた証拠からどの様に修正されるか。	●共通点…両者とも過去を研究する。 相違点…考古学者～考古学的証拠（遺跡・遺物）を利用。歴史学者～史料（文献）を利用。 ○バイキングはインディアン到来以後、コロンブス以前の一時期にアメリカに滞在していた（年代測定法によれば）。			
	【アジア人】 ＜小単元7＞ **中国人**がA.D.458年にアメリカを発見したのか	【中国人説の検討】 ○中国人はA.D.456年にアメリカを発見していたのか。	○慧深はどのようなルートや方法で航海したのか。 ●慧深のアメリカ発見は単に可能性のあることか、確実性のあることか。 ○慧深の物語・サガ・航海日誌の比較から何がわかるか。 ○新たな史的証拠から仮説はどの様に修正されるか。	○史書によれば、慧深はA.D.458年に北太平洋の2万里を航海して北米まで航海し、そこで40年過ごして帰国した。 ○「慧深の物語」は実際のインディアンの生活や北米の植生の様子と違う点がある。←「慧深の物語」は旅の報告を他の執筆者が記録し、複数の人物の解釈が介在している。 ○慧深の物語は航海日誌やサガの時代よりも古く、中国人のアメリカへの航海はほぼあり得ない。	●中国人がアメリカに到達したことは史書の史料批判からほぼあり得ないと判断できる。	到達しなかった	
	【北アフリカ人】 ＜小単元8＞ **エジプト人**がアメリカを発見したのか	【エジプト人説の検討】 ○エジプト人はアメリカを発見していたのか。	●ヘーエルダールはなぜ古代エジプト人説を唱え、どの様に立証したのか。 ○新たな歴史的証拠から以前の仮説はどの様に修正されるか。	●ヘーエルダールは、中央アメリカとエジプトのピラミッドや葦船の共通点から仮説を立て、古代エジプト人と同じ葦船と風・海流を利用して大西洋を横断した。→実験航海の成功は新たな検証方法（自ら新しい証拠を作り出す）を開拓し、エジプト人説の妥当性を高めた（実験考古学）。 ○実験航海の成功にもかかわらず古代エジプト人説は証拠不足から十分な確証が得られていない。	●エジプト人がアメリカに到達したことは実験考古学による検証を通しても未だに確証が得られていない。	到達は未確認	
パート4 これまでの学習をもとにして、解釈の基準を明らかにして出来事を解釈する	＜小単元9＞ 誰がアメリカを発見したのか ＜小単元10＞ 一般概念を作る	◎誰がアメリカを発見したのか。	○5つの仮説はこれまでの歴史的証拠からどの様に修正されるか。 ○仮説を支えているさまざまな種類の歴史的証拠からはどの説が最も有力か。 ●仮説は史的証拠のどの様な特性から確かめられるか。	○インディアン説とコロンブス説が最も有力である。←アメリカの発見者とは土地に最初に到来・定住した人々であり、これらの人々こそが大陸の主権者の資格をもつから。 ●出来事の解釈の妥当性は日記・日誌、考古学的発見物、口頭伝承、史書（物語）、実験航海などの証拠の信頼性に支えられている。 ●仮説の信頼性は、証拠の信頼度、推論の信頼度、人物や記録者・執筆者の信頼度をもとに判断される。	●過去の出来事は、科学の方法である「歴史的証拠の特性をもとにした信頼性の判断」によって解釈・理解される。	到達の時期・定住	主権者の基準の明示

（Kownslar, A. O. & Frizzle, D. B. *Discovering American History*, NY：Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1967. より筆者作成。）

社会科学の概念（本単元では①歴史学の概念と②政治学の概念）を学習者に習得させるような内容構成になっているということである。

①の歴史学の概念については史的証拠という概念を習得させる。史的証拠には航海日誌、口頭伝承、考古学的発見物、絵画などがある。史的証拠を扱うのはパート2（コロンブス説とインディアン説）とパート3（バイキング説、中国人説、エジプト人説）である。

パート2のコロンブス説で用いられる史的証拠は、航海日誌やコロンブスの日記、当時流行した用語、当時の絵画、地図などである。例えば航海日誌には日付や発見された陸地の特徴、上陸後に出会った原住民（インディアン）の特徴、交渉の様子などが詳細に記されている。

またパート3のバイキング説で用いられる史的証拠は、骨製用具・道具・石絵などの考古学的発見物と口頭伝承（サガ）である。例えばバイキングの英雄伝説（口頭伝承）であるサガには、バイキングの英雄がグリーンランドを経て北米を探検したことが語り伝えられている。また北米（現在のカナダ）の遺跡で発見された骨製用具や道具、石絵などの考古学的遺物が北欧にいたバイキングの生活用品に類似していることもわかる。

このように様々な史的証拠を検討することにより、学習者は史的証拠という概念を習得し、それぞれの史的証拠の特徴に応じて過去の事実を推測する方法を知ることになる。以上が①歴史学の概念の習得である。

次に②政治学の概念の習得について述べる。これは「主権者」概念の習得である。ここでいう「主権者」とはオリジナルな主権者を指し、後に奴隷や移民として到来して現在のアメリカを構成している主権者とは異なるものである。

本単元ではアメリカ大陸の発見者が誰かについて検討するわけであるが、これは政治学的観点から見るとアメリカの「主権者」は誰かということを検討する過程であると言える。例えばパート2のインディアン説では、考古学的証拠（インディアンの住居の遺跡や石器）および動植物の分布（シベリアで発見された狼や熊の骨と同じ種類の骨が北米でも発見されている等）から、インディアンは最初にアメリカ大陸に到達し定住していたことが推測される。またパート3の中国人説では史的証拠として歴史書の記述が検討される。この歴史書は中国人が北米まで航海し40年滞在して帰国するまでの物語である。この物語の記述を検討すると、実際のインディアンの生活や北米の植生の様子と違う点があり、この物語は旅の報告を第三者が記録したものであり、複数の人物の解釈が介在していることがわかる。したがって学習者は中国人がアメリカに到達したことはほぼあり得ないと推測する。このようにアメリカのオリジナルな主権者が誰かについて、5つの仮説を順次検討することにより、最終的に学習者は「アメリカへの到達･定住」という基準をたて、「主権者」とはアメリカに「最初に到達・定住した人々」であるという概念を習得できるようになっている。

このように第2の原理は、社会科学の方法を学習内容としていることである。

内容構成原理３　「出来事の理解モデル」による時代像の理解

第3の原理は、「学習の過程」の観点からみると、上述の「出来事の理解モデル」という推論の型を用いて出来事と時代像の関係を理解する様な内容構成になっているということである。

出来事の解釈および出来事と時代像の関係を理解する上で最も重要なことは、発問に対して学習者が自分で考え、答えを見つけ出すことであり、その過程で理解を深めていく。

パート1～4の各パートで学習者が理解を深めていく過程（表6の横軸）には、あるひとつづきの推論の型があることがわかる。この推論の型は、歴史上の「人物は自分の目的や信念、経験や特定の環境（背景や状況）を基にして視点や立場を構成し、それに基づいて判断や行為を行う。その結果出来事が構成され、時代像が形成される」というものである。このような推論の型を本論文では、「出来事理解のモデル」と呼ぶ。

これをパート2のコロンブス説の検討を例にとって説明すると次のようになる。

パート2ではまず、「どの様な証拠からコロンブスがアメリカを発見したと言えるのか」が提示される。これは、コロンブス説はどの様に立証できるかということが、学習者にとっての「解明すべき課題」（①）であることを示すものである。これに答える過程で学習者は、コロンブスがマルコポーロの東方見聞録を読み、アジアに富を求め、スペインの女王の支援を得たという「背景や状況」（②）を知る。そして②に基づいてコロンブスはアジアを目指して航海しようと判断し（「人物の判断」（③））、西に向かって出航した（「人物の行為」（④））。その結果、アメリカ大陸に到達したことを知る。（「結果としての出来事」（⑤））。そして当時は新大陸を発見し富を獲得することを期待したヨーロッパ人が新大陸を求めて航海をし始めた時期であったことを理解する（「時代像の形成」（⑥））。

①から⑥を整理すると次のように言うことができる。

学習者にとっての「解明すべき課題」（①）は論題と呼ぶことができる。議論において論題とは議論すべき問題であり、取り組むべき問題という点で共通点を持つからである。学習者は教師の発問により、人物がどの様な背景、判断、行為を経て出来事（アメリカ発見）を成し遂げ、どの様な時代像を形成したかを検討する。この過程が②～⑥である。どのような「背景や状況」（②）にもとづいた③「人物の判断」により④「行為」がなされたかを知る。そして②～④の結果として⑤「出来事」が生じたこと、そして⑥「時代像（時代の特色）」が形成されたことを理解する。そして①「論題」に対する答え

を見つけていく。②～⑤は原因であり⑥の時代像は結果である。つまり、②③④⑤と⑥は因果的連鎖で結ばれており、学習者は出来事と時代像の関係を因果的連鎖として理解する。この因果的連鎖を理解する過程を図で示すと次のようになる。

①論題：②背景や状況＋③人物の判断→④人物の行為
→⑤結果としての出来事＝⑥時代像（時代の特色）

図１　出来事理解のモデル

本単元はこのような「出来事理解のモデル」を用いて学習者に出来事と時代像の関係を理解させるような内容構成に成っている。

以上、内容構成原理について述べてきた。第1の原理は、社会科学の方法を習得させるような内容構成になっているということ、第2の原理は、社会科学の概念を習得させるような内容構成になっているということ、第3の原理は「出来事の理解モデル」を用いて時代像を理解させるようになっているということであった。

４．２　学習方法原理－社会科学の方法を通した出来事の研究的理解

前述の（1）では本単元の内容構成原理についてみてきた。ここでは、学習者がどの様な方法で学習を深めていくのかという学習方法原理について考察する。

本単元の内容構成と（1）の内容構成原理で述べた「出来事理解のモデル」を総合すると、図2が抽出できる。そこでまず図2の基本的な構成を説明する。

図1の縦軸は、内容構成原理の項で示した表6の縦軸（パート1～4）と同じである。違いは横軸であるが、それは次のような違いを示している。すなわち表6は、教師の発問に対して学習者が答えを追求する中でどの様な歴史理解をするかという、「学習者」に焦点を当てたものであった。これに対して図1は「出来事」に焦点を当てる。以下で横軸を具体的に説明していく。

横軸は、前述した「出来事理解のモデル」の5つの要素を、左から順に①論題、②背景や状況、③人物の判断と行為、④出来事、⑤出来事と時代像の関係、と並べ、その右には「社会科学的歴史理解の方法」、そして右端には最終的に学習者が習得する「構築された歴史理解」の内容を示したものである。つまり、歴史上の人物がどの様な課題に取り組み（①論題）、どの様な背景・状況（②）のもとで、どの様な判断・行為（③）をして出来事（⑤）を作り出し、時代像（⑥）を形成していったのかについて、要素ごとに詳細に検討する。そしてこれらの理解を支えるのは「社会科学的歴史理解の方法」である。「社会科学的歴史理解の方法」とは仮説―検証という社会科学の方法を用いて歴史の出来事を解釈し明らかにしていく方法である。これは「史的証拠と科学の方法（仮説―検証）」と「科学の方法による出来事の解釈」の2つで構成される。図1ではこの詳細な検討過程を分析的に示した。

次に、本単元の学習方法原理について図1を用いて説明する。

学習方法原理１　社会科学の方法を用いた主権者概念の獲得

第1の学習方法原理は、「学習内容の発展」の観点でみると、前述の内容構成原理で述べた「社会科学の方法（本単元では証拠に基づいて仮説を検証する歴史学の方法）」を用いることによって、現在のアメリカの主権者が誰であるかを考えさせるような方法をとっているということである。

これをパート3のエジプト人説で具体的に説明すると以下のようになる。社会科学の方法は仮説を立ててそれを検証する方法である。学習者は、エジプト人は葦船を用いて大西洋を横断し、アメリカ大陸に到達していたのでアメリカの主権者であるという仮説を立てる。この仮説について、実験考古学者のヘーエルダール達が実際に葦船を作り、海流や星座を頼りに大西洋を横断して過去のエジプト人がアメリカに到達した可能性があることを検証したことを知る。その結果、ヘーエルダールの実験航海の成功は新たな仮説検証方法を開拓し、エジプト人説の妥当性を高めたこと、ただし実験航海の成功にもかかわらず証拠不足からエジプト人はアメリカの主権者であるとは言えないということを理解する。逆に言えば、現在の主権者とは定住している国家の構成員であるという主権者概念を理解することになる。

以上のように、この学習方法原理は社会科学の方法を用いて現在のアメリカの主権者が誰であるかを考えさせるというものである。

学習方法原理２　社会科学の方法を用いた出来事および出来事と時代像の関係の理解

第2の原理は、「学習の方法」（モデル）の観点でみると、社会科学の方法を用いて、出来事および出来事と時代像の関係を理解させるという学習方法をとっているということである。学習者はアメリカの発見という出来事について仮説を立て、それを検証していくということについては前述の第1原理で述べた。それにとどまらず、出来事と時代像の関係を理解する際にも社会科学の方法（仮説と検証）を用いているということである。

これを具体的にパート2のコロンブス説を例にとって説明すると以下のようになる。学習者は、コロンブスがアメリカ大陸を発見したという出来事について仮説を立て、航海日誌や地図などをもとにコロンブスがアメリカに到達したことが確実であるということを検証する。そして、コロンブスのアメリカ大陸発見という出来事は、ヨーロッパ人にとって富の可能性を秘めた有望な土地の発見を意味し、その期待は「新世界」という用語に込められてヨーロッパ中に広がったという時代像を理解する。

学習者は、当時の絵画、当時流行した用語（新世界、新大陸など）などの史的証拠をもとに、これらの出来事

	論題（仮説）	:	構築主義的歴史 理解の方法							社会科学的 歴史理解の方法				構築された歴史理解
			背景や状況	＋	歴史的人物の判断と行為	→	出来事	→	時代像	＋	歴史的証拠と科学の方法	→	科学の方法による出来事解釈（検証）	＝	
パート1	誰がアメリカを発見したのか。						・コロンブス／インディアン／バイキング／中国人／エジプト人の何れかがアメリカを発見した。			＋	・歴史の出来事は人々によって多様に解釈（主張）され，理解されている。	→	・歴史家は過去の出来事について仮説を立て、様々な歴史的証拠を用いて妥当性を検証し、出来事を解釈している。	＝	・アメリカの発見者については諸説あ、定まった理解はない。。
↓									↓						
パート2	コロンブスがアメリカを発見したのか否か。	:	・当時、ヨーロッパ諸国は新たな領土や産物を獲得するために探検航海を援助していた。 ・コロンブスは東洋との貿易ルート開拓のために中国を目ざして航海した。	＋	・西方のインドに到達したと考えて【判断】、米大陸に上陸した【行為】。 （コロンブス達は船から海岸の海鳥、緑の植物、果実の枝、光などを確認し、大陸の存在を確証した。）	→	・コロンブスは新大陸を発見した。		「新世界」アメリカの発見は当時のヨーロッパ人にとってのみ意義ある発見であった。	＋	○歴史的証拠 ・航海日誌 ・新大陸上陸場面の絵画 ・当時流行した言葉（新世界、新大陸） ・航海ルート地図 ○科学の方法 ・歴史学の史料批判	→	・航海日誌の内容と実際の地理的位置、植生などの照合による一致から、コロンブスはほぼ確実に新大陸アメリカを発見した。	＝	・コロンブスが 1492 年にアメリカ大陸を発見したことは航海日誌の史料批判からほぼ確実である。また当時の絵画や「新世界」の流行語の分析から、「発見」とは富を求めていたヨーロッパ人の視点からのみ意義ある出来事であった。
									↓						↓
	インディアンがアメリカを発見したのか否か。	:	・12000 年前にはアジアと北米は陸つづきであり、移動が可能であった（大陸間民族移動説）。	＋	・インディアンの祖先たちはよりよい暮らしを求め【判断】、シベリアから北米へと移動した【行為】。	→	・インディアンの祖先は 12000 年前（コロンブスの発見よりはるか以前）にアジアから北米に到来し定住した。	→	・最も初期からアメリカに定住してきたインディアンは先住民として米大陸の主権者と言える。	＋	○歴史的証拠 ・石器・石鏃・住居跡、動植物とその分布（地図） ・大陸間民族移動ルート地図 ○科学の方法 ・考古学　・人類学	→	・シベリアと北米で発見の石器や動植物の共通性から、インディアンの祖先はほぼ確実に 12000 年以前からアメリカに到達し、定住していた（大陸間民族移動説）。	＝	・インディアンが 12000 年以前にアメリカ大陸に到達、定住したことは考古学的・人類学的証拠からほぼ確実である。最初の定住者である彼らは米大陸の所有者（国家の主権者）でもある。（ただし政治組織はあるが国家の観念をもっていなかった。）
↓									↓						↓
パート3	バイキングがアメリカを発見したのか否か。	:	・バイキングはノルウェー→グリーンランド→ファウンドランドに交易ルートを持っていた。	＋	・バイキングは交易ルートの拡大を望んでいた【判断】。英雄たちが交易ルート開拓のため長旅をした【行為】。	→	・バイキングの英雄が長旅をし、北米に到達した。 ・この英雄の長旅は口頭伝承サガとして伝えられ、後に記録された。	→	・バイキングは北米に到達していたが定住はしていなかったので、米大陸の主権者とは言えない。	＋	○歴史的証拠 ・口頭伝承サガ ・石器・石鏃、住居跡、生活用具など ○科学の方法 ・歴史学の史料批判（オーラルヒストリー） ・考古学の方法	→	・口頭伝承サガにある英雄の北米への旅は不確実な情報だが、北米でのバイキングの遺跡・遺物の発見から、彼らはほぼ確実に A.D.1000 年頃に北米東海岸に到達していた（一時期の滞在）。	＝	・バイキングが A.D.1000 年までに北米に到達していたことは口頭伝承と考古学的証拠の両方からほぼ確実である。彼らはコロンブスよりも早く北米に到達していたが定住しなかったので、米大陸の所有者（国家の主権者）ではない。
									↓						↓
	中国人がアメリカを発見したのか否か。	:	・中国には東方にすばらしい土地（扶桑）があるという伝説があった。	＋	・中国人慧深は A.D.458 年に伝説の土地扶桑を求め【判断】、航海した【行為】。	→	・中国人慧深はアメリカに到達し、40 年間滞在した。 この慧深の航海は中国の歴史書に記録された。	→	史書の執筆者たちは、当時の社会的・政治的必要性から慧深の旅を記録した。	＋	○歴史的証拠 ・中国の史書（梁書など） ○科学の方法 ・歴史学の史料批判	→	・慧深の物語は実際の植生や生活実態と矛盾した内容が多く、アメリカへの航海はほとんどあり得ない。	＝	・中国人が A.D.458 年に北米に航海したことは史書の内容の検討（史料批判）からほぼあり得ない。 ・米大陸の所有者（国家の主権者）ということはあり得ない。
									↓						↓
	エジプト人がアメリカを発見したのか否か。	:	・大西洋にはアメリカに向かう風と海流があり、葦船で航海できる状況にあった。	＋	・エジプト人は海流と風に乗って航海した【行為】。（【判断】は無し。）	→	・エジプト人は葦船でアメリカに到達した。 ・ヘイエルダールは再現葦船によって北アフリカから中米に実際に航海した。	→		＋	○歴史的証拠 ・ピラミッド、葦船 ・実験航海のデータ ○科学の方法 ・実験考古学	→	・葦船による再現航海実験から、エジプト人が葦船でアメリカに到達した可能性がある（確証はない）。	＝	・エジプト人説は仮説として示され、その妥当性は考古学的再現実験で部分的にのみ確かめられた。そのため，現在も仮説にとどまっている。
↓									↓						↓
パート4	誰がアメリカを発見したのか。	:							・コロンブス説の「発見」とは当時のヨーロッパ人の見方であるにすぎない。 ・コロンブスの到達以前から米大陸に定住していたインディアンの方がもともとの主権者である。	＋	・過去の出来事は，様々な歴史的証拠を通して解釈される。その解釈の信頼性は証拠自体の信頼性を通して判断される。	→	・誰がアメリカを発見したかについては，発見者の考え，証拠の種類，執筆者の見方，学説をもとにした多様な理解がある。	＝	・過去の出来事は，史料、口頭伝承、考古学的発見物などの歴史的証拠の特性を通して多様に解釈され理解される。 ・アメリカの発見者とは土地に最初に到来・定住した人々であり、これらの人々こそが大陸の所有者（国家の主権者）の資格をもつ。 ・アメリカの発見者としてはインディアン説とコロンブス説が最も有力である。

図２　単元「誰がアメリカを発見したのか」における歴史理解構築の構造　（筆者作成）

と時代像の関係について理解するのである。

以上のように、第2の学習原理は出来事および出来事と時代像の関係を理解させるために、社会科学の方法を用いるということである。

学習方法原理３　社会科学の方法を用いた社会科学の概念の習得

第3の学習方法原理は、「学習の方法」と「学習内容の発展」の両方の観点でみると、学習者に社会科学の概念を習得させるために社会科学の方法を用いるという方法をとっているということである。本単元で扱う社会科学の概念は（1）歴史学の概念（「史的証拠」の特性）、（2）政治学の概念（「主権者」）である。この2つの概念を習得させるために用いられるのが社会科学の方法、つまり史的証拠に基づいて仮説を検証する歴史学の方法である。「史的証拠」は、航海日誌、目撃者の証言、口頭伝承、考古学的発見物などである。これらの史的証拠を用いて学習者は、アメリカを発見したと思われる人物や集団についての仮説を検証していく。検証の過程を具体的にパート2のインディアン説を例にとると以下のようになる。

ここで用いられる史的証拠は、北アジアと北米大陸で発見された人工遺物（石器や動物の骨）、食用植物の種などの考古学的発見物の分布地図、およびこれらの放射性同位元素を用いた考古学的発見物の年代特定、当時の大陸の様子を表した地図である。学習者は教師が用意したデータ・バンクという史的証拠のセットの中から自由に選択して、読んだり、見たり、触れたりする。そして、これらの史的証拠の特性を理解し、アメリカ大陸に最初に到来・定住したのはインディアンであるということを理解する。最初に到来･定住したということは､インディアンがアメリカ大陸の「主権者」であることを理解することに他ならない。このように第3の原理は、社会科学の方法を用いて（2）政治学の概念、つまり「主権者」の概念を習得するような学習方法をとっているということである。

以上、本単元の学習方法原理について述べてきた。第1の原理は、「社会科学の方法」を用いることによって、現在のアメリカの主権者が誰であるかを考えさせる方法をとっていること、第2の原理は、社会科学の方法を用いて、出来事および出来事と時代像の関係を理解させるという学習方法をとっているということ、第3の原理は、学習者に社会科学（歴史学と政治学）の概念を習得させるために社会科学の方法を用いるという方法をとっているということであった。

５　特質と問題点

本稿では、出来事の解釈に基づく歴史学習の論理について、ホルト・データバンク・システムの単元「誰がアメリカを発見したのか」の分析を通して解明してきた。この歴史学習には以下の3つの特質が見られる。

第一の特質は、本単元のアメリカの発見者は誰かについての学習は､単に発見者の名前を確定するだけでなく、最終的にアメリカの「主権者」は誰かという政治学の概念を学習者に習得させることが意図されているということである。

学習者は5つの学説を順次検討し、最初にアメリカ大陸に到達・定住したのはインディアンであることを推測する。そして最終的には「アメリカへの到達・定住」という基準をたて、「主権者」とはアメリカに「最初に到達・定住した人々」であるという政治学の概念を習得する。このような政治学の概念を習得させている単元は他にはなく、政治学の概念の習得はこの単元の大きな特徴であると言える。

第二の特質は、学習者に社会科学の方法を用いて社会科学の概念を習得させているということである。社会科学の方法とは仮説を立てそれを検証する方法であり、この方法を歴史の学習で用いた場合は歴史学や考古学の方法と呼ぶことができる。本単元では学習者が自分で仮説を立てるのではなく、アメリカの発見者についての5つの学説を仮説として用い、その学説の妥当性について史資料を通して検証する。社会科学の概念とは、本単元では歴史学の概念と政治学の概念であり、政治学の概念はこの場合「主権者」であることは第一の特質で述べた。歴史学の概念とは、本単元では史的証拠という概念であり、航海日誌・口頭伝承・考古学的発見物・絵画などである。

つまり第二の特質は､歴史学と考古学の方法を用いて、政治学の概念（アメリカの「主権者」）および歴史学の概念（史的証拠）を理解させる構造になっているということである。社会科学の方法を用いて社会科学の概念を習得させているという点でこの学習は「社会科学理解型出来事学習」と呼ぶことができる。

第三の特質は、社会科学の方法を用いて歴史学の概念を理解させる際に、非常に多様な史的証拠を用いているということである。本単元では、文書史料に加えて考古学的史料（骨、道具、石絵）および口頭伝承が、学説の妥当性を検証する史的証拠として用いられることに大きな特徴がある。

他方で問題点もある。第一の問題点は、学習者の主体的･自律的な学習を保障する方略が不明確なことである。本単元の中核は、アメリカ大陸の発見者について5つの解釈（仮説）の検討であり、検討の過程で政治学の概念や歴史学の研究方法の習得に関しては緻密な計画がなされている。しかし、個別の学習者の解釈がグループ学習でどの様に発展するのか、グループ同士の主張のやり取りを通して学級全体でどの様に解釈の妥当性を検討し、妥当性のある解釈として理解するのか、という点が不明確である。

第二の問題点は、小学生の認知発達のレベルから見て学習の難度が高いことである。ホルトは、映像・音声・

実物などを多用して理解を促進する工夫がなされている。しかし、本単元で考察対象とする集団の行為や出来事は、子どもの生活環境からは空間的、時間的にかなり離れたところにある。また、グループ学習や討論によって主張を展開する学習では学習者相互の意見の交流が不可欠である。そこで、本単元のテーマについて他の学習者の意見を聞き、自分の解釈も主張できるという、解釈の相互交流ができるレベルに学習者が至っていることが必要である。そのため、認知発達の観点から見て、もう少し上の学年に配当した方がより効果的な学習が生まれると思われる。

注

1　アマースト・プロジェクトの単元が備えている構築主義歴史学習の特徴を概略的に紹介した研究としては寺尾（2014）の論文を参照されたい。また、アマースト単元のより具体的な特徴を解明した研究としては寺尾（2004、2015）の論文がある。

2　ホルト・データバンク・システムは、1950年代末から60年代の米国を中心として多く展開した科学主義の教育カリキュラムとして開発された。新社会科と呼ばれる社会科の代表的なカリキュラムである。これの特徴については池野（2000）の解説を参考にした。

文献

Curry, Richard O., Sproat, Hohn G., Cramer, Kenyon C.（1972）, *Textbook The Shaping of America*, Holt Rinehart and Winston Inc.

Fielder, W.R., General Editor（1976）, *Holt Databank System, Teacher's Guide INQURING ABOUT AMERICAN HISTORY*, Holt Rinehart and Winston Inc.

Fielder, W.R., General Editor（1976）, *Holt Databank System, Textbook INQURING ABOUT AMERICAN HISTORY*, Holt Rinehart and Winston Inc.

Kownslar, A. O. & Frizzle, D. B.（1967）, *Discovering American History*., Holt, Rinehart and Winston, Inc.

Kownslar, A. O., W. R. Fielder, W. R., Hogle, K. G..（1972, 1976）, *Holt Databank System-A Social Science Program. Inquiring About American History. Studies in History and Political Science. Teacher's Guide*. Holt, Rinehart and Winston, Publishers.

池野範男（2000）、「探究学習」、『社会科教育事典』、ぎょうせい、p.218。

川崎二三雄（1987）、「探求に基づく社会科教授メディア構成－ホルト社会科『アメリカ史についての探求』を事例として－」、全国社会科教育学会『社会科研究』、第35号、pp.64－72。

寺尾健夫（2004）、「認知構成主義に基づく歴史人物学習の原理－アマースト・プロジェクト単元『リンカーンと奴隷解放』を手がかりとして－」、全国社会科教育学会『社会科研究』、第61号、pp.1－10。

寺尾健夫（2014）、「現代アメリカにおける構築主義歴史学習の原理と展開－歴史像の主体的構築－」、『福井大学教育地域科学部紀要』、第4号、pp.185－209。

寺尾健夫（2016）、「次代の政治思想や倫理的判断に焦点を当てた歴史解釈学習の原理」、『福井大学教育実践研究』、第40号、pp.25－36。

藤井千之助（1975）、「アメリカ社会科における歴史教育－主として初等教育を中心として、」『広島大学教育学部紀要』、第二部第24号、pp.87－97。

藤井千之助（1976）、「ホルト・データバンク・システムにおける歴史の取り扱いに関する考察」、『広島大学教育学部紀要』、第二部第25号、pp.145－155。

山田秀和（1999）、「多元主義を基盤とする自国史課程編成－ホルト・データバンク・システム『アメリカ史』を手がかりとして－」、中国四国育学会『教育学研究紀要』、第45巻第2部、pp. 227－232。

山田秀和（2001）、「市民性教育のための社会科学科歴史－ホルト・データバンク・システム『アメリカ史』の再評価」、全国社会科教育学会『社会科研究』、第54号、pp.11－20。

付記　本研究は、平成25 ～ 28年度科学研究費補助金基盤研究（C）　課題研究番号25381246（研究代表者　寺尾健夫）の一環として行った。

The Principles of Elementary School History Lessons Focused on Interpreting Incidents Using Historical Materials and Scientific Method － Analyzing the Unit "Who Discovered America?" of the US New Social Studies Project, Holt Data Bank System－

Takeo TERAO

Key words：New Social Studies, History Teaching, Constructivism, Historical Interpretation, Citizen Ship, Historical Materials, Scientific method, Incident